

恋愛と恋愛結婚イデオロギーの誕生について

—— 日欧比較文化の視点から

荒木 詳 二

外国文化研究室

Über die Entstehung der romantischen Liebe in Europa und Japan

Shoji ARAKI

Department of World Civilizations

Zusammenfassung

In dieser Abhandlung wird versucht, darauf zu antworten, wie und wann die romantische Liebe in Europa entstanden ist und sich verbreitet hat, wie sie die damaligen Dichter in den Romanen geschildert haben, und wie und wann diese europäische Liebe in Japan eingeführt und aufgenommen wurde.

Während die romantische Liebe in Europa in der zweiten Hälfte des 18. Jahrhunderts unter dem Einfluss der Empfindsamkeit entstanden ist, wurde sie in Japan Ende des 19. Jahrhunderts durch den amerikanischen Protestantismus eingeführt und kam besonders bei den jungen Christen in Mode, aber sie wurde damals oft mit der platonischen Liebe gleichgesetzt.

Trotz verschiedener Unterschiede kann man als einige gemeinsame Punkte folgendes nennen, dass die romantische Liebe zur Gründung der modernen Familie beigetragen hat, durch die Lektüre der Romane oder der Zeitschriften bekannt gemacht wurde und nach und nach für unentbehrlich bei der Ehebeschließung und auch in der Familie gehalten wurde.

Weiterhin ist zu erwähnen, dass die moderne Familie entsprechend der Entwicklung des Kapitalismus und dem Aufstieges des Bürgertums zustande kam, aber eigentlich ein patriarchalisches System ist und deshalb die geschlechtliche Diskriminierung verursacht hat.

はじめに

昨年2005年度8月24日の朝刊各紙に小さな記事ではあるが、衝撃的なニュースが報告された。それは我が国統計史上初めて上半期で死亡数が出生数を上回り、人口減が始まったという内容であった。2007年度からと予想されていた人口減が既に始まったのである。NHK放送文化研究所の『現代日本人の意識構造』(第6版)によれば、「日本人の意識調査」が始まった1973年と30年後の2003年とを比較すると、出生数は209万人から112万人へとほぼ半減したということである。¹⁾

同書の家族に関する調査を見れば、若者の過半数が、そもそも結婚を当然と認めなくなったこと、婚前交渉に肯定的であること、女性は家庭と職業の両立を当たり前だと考えていること、男性は家事分担を当然と見なしていること、子なし家庭にも肯定的であることが見て取れる。結婚観・家庭観・職業観がこの30年で大きく変わってきている。

非婚・晩婚・離婚の増加、出生率の低下、少子高齢化は先進国では一般的な現象であるが、今から我が国でもますます福祉政策や年金政策に関する構想力が必要となってくるであろう。また同時に崩壊しつつある家族のあり方が問われることにもなる。社会の構成員のほとんどが結婚する「皆婚社会」は既に崩れ、若者の大半は結婚を強制と考えなくなった。恋愛して結婚して子供を作ることを当然とするという「恋愛結婚イデオロギー」は徐々に退場しつつある。

高度資本主義社会、いわゆる情報社会の中で、ジェンダー研究でいうところの恋愛・結婚・生殖の三位一体からなるロマンチック・ラブ・イデオロギー(恋愛結婚イデオロギー)は、生殖技術・避妊技術の進歩に伴う性と生殖の分離、「援助交際」「出会い系サイト」などの性の商品化による性愛の分離、「フリン(不倫)」「婚前交渉」など婚姻外の恋愛の認知による性と結婚の分離により実質的に崩壊の兆しを見せている。しかし一方では「恋愛結婚」を理想として「カップル強制」を押し付ける圧倒的なマスコミの影響もあって、このイデオロギーも依然として無視できない力として存在している。

なるほど19世紀末の参政権獲得を目指した第一次フェミニズム運動、さらに社会に偏在するジェンダー差別を告発する1970年代の第二次フェミニズム運動により、女性は政治的・社会的権利を獲得してきた。我が国でも1999年には男女共同参画基本法が成立し、女性は法律上男女平等社会実現への道に、一歩を進めたといえるだろう。いまや半数以上の女性が職に就いている。しかし実情は、いわゆる「総合職」の女性はさして増えず、女性の大半は補助労働・パート・フリーター・派遣などの「周辺労働」に従事している。女性が外で働く場合でも家事労働の負担は女性の肩にかかる場合が多いようである。こうして見ると、ロマンチック・ラブ・イデオロギーと結びついた「性分業」は今なお一般的であり、現代もジェンダー・スタディーズでいうところの「家父長的社会」(「男性中心社会」)はなお強固であるともいえる。「性別分業」を内面化した「主婦」願望の女性も少なからず存在する。

ところでこうしたロマンチック・ラブ・イデオロギーのもと、親子・夫婦が情緒的な絆で結ばれた私的な親密な家族は、近代産業の発展および近代国家の形成とともに発生した「近代家族」と呼ばれる。「近代家族」では、夫は家庭外で働き、妻は家庭内で育児と家事を担当するという「性別分業」が

確立した。性的には放縦で、教育は家庭教師、家事は使用人任せであった貴族の生活を否定することによって成立した「近代家族」は、ブルジョア階級から労働者階級へと広がっていったが、一方では男性の家庭外での性行為は許されるが。女性にはそれを禁ずる「性的二重基準」の存在する性差別をも内包した制度であった。

しかしこの「近代家族」も今や根底からその存在が脅かされている。第二次フェミニズム運動による性革命、女性の高学歴化に伴う社会進出、重工業からサービス産業・情報産業へ産業構成の変化、家事や育児の外注化(外食産業やクリーニングや保育所など)、家庭電化、そしてロマンチック・ラブ・イデオロギーの衰退により、女性は家庭・結婚からの独立性を強め、より自由な存在となってきている。非婚・晩婚・離婚の増加はロマンチック・ラブ・イデオロギーを払拭した女性の自立のための摩擦係数ともいえるだろう。

本稿では、ロマンチック・ラブおよびそれを基礎としたロマンチック・ラブ・イデオロギーの成立と衰退をテーマとして、まずイギリス、ドイツおよびフランスでのロマンチック・ラブの成立について述べる。さらにロマンチック・ラブを描いた代表的恋愛小説である『若きヴェルテルの悩み』における「愛」「恋愛」を分析する。次に日本におけるロマンチック・ラブ=恋愛について、「恋愛」という翻訳語の成立事情を考察し、さらに日本で初めて近代的な「恋愛」を唱えた北村透谷と明治期の本格的な恋愛小説である鷗外の『舞姫』の「恋愛」を取り上げる。最後に日欧比較文化の観点から「恋愛」について考察し、現代日本の恋愛と恋愛結婚イデオロギーの現状分析を試みる。

1

ロマンチック・ラブ・イデオロギーは近代資本主義とともに誕生した。前近代の農村共同体では家族全員で家族内労働がなされていたが、近代資本主義の発達により、家族から生産機能が切り離されるなかで、父親が工場で生産の領域のための労働力となる一方で、家族は消費共同体となり、社会と家族が分離し、性別分業体制が成立し、母親の無償の家事労働は消費財を購入する貨幣を稼ぐ父親の有償労働の補助労働となり、生産を担う父親を家長とする家父長的な近代家族が誕生したのであった。こうした近代工業社会の家族形態=性別分業体制を支えたのが、ロマンチック・ラブ・イデオロギーであった。

ちなみに性別分業に関する状況は基本的には日独共通であるといえよう。ドイツ近代の女性史を概観したドイツのフェミニズム研究者ウーテ・フレーフェルトは『ドイツ女性の社会史』で、性別分業に関する現在の状況を次のように批判している。フレーフェルトはまず「両極的な性役割のモデルは、ほとんど無制約の説得力をもって現在まで続いている。生得的な家事労働者としての女性には、職業の領域における副次的な場が、ただ条件つきで請求に応じてのみ許されるにすぎない」¹⁾としたうえで、次のように述べる。「こんにち少数の例外を除き、もはや多数の職業から女性を締め出す、公的で法律にうたわれた排除規定は存在しないが、非公式の排除メカニズムは妨害も後退もなしに作動し続

けている。]²⁾

ロマンチック・ラブ・イデオロギーは近代小説とその普及時期を同じくしている。「恋愛は小説の申し子」である。人々は恋愛をする前に、小説に書かれた恋に恋をするのである。18世紀イギリスで恋愛メディアとしての恋愛小説が成立した。それまでの文学の形式と読まれ方が大きく変わって恋愛小説が誕生した。有産階級の多くの若い女性が、巡回図書館を心待ちにして、恋愛小説に殺到したのである。

イギリスの歴史学者ローレンス・ストーンは、1780年以降ロマンチック・ラブはロマン主義小説とともに広まったと説明して、次のようにいう。「ただ言えることは、歴史上初めてロマンチック・ラブが有産階級のあいだで見苦しくない結婚の動機になったということであり、またそれと同時に、巡回図書館の図書を一杯にした、同一の主題に捧げられた小説の類が洪水のように増えていたことであった。]³⁾

ただローレンスは18世紀後半のロマンチック・ラブについて、スタンダールの「情熱恋愛」(狂気の愛)と同じ意味で使っているようである。「ロマンチック・ラブが存在したということはそれほど重要なことではない。そのことには何ら新しいものはないからである。18世紀の中期と末期に非常に顕著であったのは、それ以前に見られたものとは根本的に違う、ロマンチック・ラブに対する精神的態度である。ロマンチック・ラブは、それが流行することによっていっそう一般的なものにならざるを得ず、そのフラストレーションに対する反応も、かつて以上に極端なかたちを取るようになった。]⁴⁾

ロマンチック・ラブを制度破壊的な狂気を含む愛とするか、もっと穏やかな体制順応的な理性的な愛とするか意見の分かれるところである。イギリスの社会学者アンソニー・ギデンスは『親密性の変容-近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』で、ロマンチック・ラブを狂気的な「情熱恋愛」とは異なる、高潔で未来志向型の愛として、その背景にキリスト教があるとする。ギデンスは次のように説明する。「キリスト教の倫理観と結びついた愛情を理想化する観念の出現は、ヨーロッパに特有のものであった。神を知るために、人は神に身を捧げなければならず、またそうした帰依をとおして自己理解を達成できるという戒めが、男女の摩訶不思議な結びつきにとっても不可欠な要素となっていったのである。]⁵⁾ またロマンチック・ラブの成立状況さらにその小説の関係について次のように述べている。「18世紀後半以降人びとの間でその重要さが認識され始めたロマンチック・ラブは、一方ではこうした理想に近づき、また〈情熱恋愛〉の要素を取り入れていったが、にもかかわらず両者は別個のものとなっていった。ロマンチック・ラブは一人ひとりの生に物語性という観念をもたらしたのである、(中略)ロマンチック・ラブの高まりは、小説の登場とほぼ同時に生じ、両者の結びつきは、新たに見いだされた叙述形式のひとつとなっていったのであった。]⁶⁾ ギデンスはロマンチック・ラブの高潔さ、崇高さを強調する。「ロマンチック・ラブ的愛着では、崇高な愛情という要素が、性的熱中という要素を制していく傾向がある。(中略)愛情は、一方でセクシュアリティを包含しながら、同時にまたセクシュアリティと絶縁していったのである。〈高潔さ〉は、男女両方にとって新たな意味を呈するようになり、もはやたんなる道徳的潔白だけでなく、相手の人間を〈特

別な存在〉として際立たせる、その相手の有する人格的特性をも意味するようになったのである。』⁷⁾ ギデンスは近代家族の誕生、親子関係の変化、母親の理想化といった時代状況の変化と対応したロマンチック・ラブにおいては、最重要な要素として「親密性」を強調する。ロマンチック・ラブにおける「親密な関係」こそ近代家族を安定させる要素なのである。「ロマンチック・ラブは、その発端時から親密な関係性の問題を適してきた。ロマンチック・ラブは、肉欲や、さらに野卑なセクシュアリティとは相容れないものである。なぜなら、愛する人を理想化-そうした理想化は、物語の重要な要素であるが-するからというよりも、ロマンチック・ラブが、気持ちの通じ合いを、つまり、その性質上気持ちを落ち着かせる魂の触れ合いを想定しているからである。』⁸⁾

ギデンスも強調しているように、18世紀は「文化の女性化」の時代であった。イギリスのマルクス主義批評家テリー・イーグルトンは「感傷主義」の作家リチャードソンに関する批評『クラリッサの陵辱』でリチャードソンは価値の「女性化」する時代を描いたとしてこの時代を次のように分析している。「伝統的な親族関係は、愛情によるつながりを求めず、どちらかというともっぱら経済的・系譜的なつながりによって結びつく、個人の人格を認めない相対的に開かれたシステムであったのだが、リチャードソンの時代には、このシステムが凋落し、前の時代にはみられなかった、閉じた「核」家族が台頭する。この核家族は、その父権制構造によって権威主義的国家体制を強化するとともに、伝統的に教会が受けもっていた宗教機能を分担するまでになる。だが、この専制的父権制には、男女間の情緒的結びつきを深め、新たな主体形式の勃興を促がすというもうひとつの顔があった。〈子供〉の誕生、婚姻における精神的伴侶関係の重視、〈多感性〉と〈感受性〉信仰の増大などが、その主たる兆候であった。』⁹⁾ ジェンダー研究家エドワード・ショーターも『近代家族の誕生』で、リチャードソンらの感傷主義作家たちの中心テーマである sentiment (感傷、感受性) に注目し。sentiment (感傷、感受性) の波が三つの異なる領域で伝統的家族の追放に力を貸したのだと提唱して、その三つの領域として、求婚条件が経済や血統から、個人的幸福や自己完成へ変わったこと、母子関係でも、母の関心事が、生活素材の供給から子供の幸福へと変わったこと、また家庭と社会の関係では、近代家族は、生産の場であった伝統家族とことなり、社会から分離された情緒的な結合体となったことをあげている。¹⁰⁾

こうした「女性的」な要素は経済的安定を目指すブルジョア階級の望むものであった。しかし男性的・攻撃的・残忍な貴族文化に対する女性的なブルジョア文化は、社会から女性を隔離し家庭に閉じ込めるという点で抑圧的な文化でもあった。イーグルトンはこう説明している。「恋愛を重んじるという新たに芽生えたイデオロギーが、結婚相手の選択にあたって子供の意志を尊重する傾向と手を握って、父権制におけるさまざまな拘束力を弱める方向に向かっていたとすれば、そのイデオロギーは同時に女性の内面にもぐり込み、女性を恐喝して夫への衷心からの隷属を強要したのであった。』¹¹⁾

ドイツでも社会的に個人主義的傾向が強くなった18世紀半ばころから上層市民層のなかで「愛にもとづく結婚」が重視されるようになってきた。ドイツでは、この「愛にもとづく結婚」の普及にあたっては、道徳週刊誌や家庭雑誌が大きな影響を及ぼしたとされる。道徳週刊誌とはイギリス啓蒙主義の

影響下、1820年頃イギリスと貿易を通じて関係の深かったハンブルクを起点に多数出版されるようになった雑誌で、市民生活を取り巻くさまざまな問題を取り上げ、道徳を奨励し社会の不正を糾弾するものであった。形式的には情緒的・説教的なスケッチ、道徳的記述、書簡、さらに結婚や教育などの現実生活や迷信や死の恐怖などの宗教的生活に関する対話および討論からなっていた。そこでは、貴族階級の「性道徳の乱れ」や浪費癖、世間離れしたフランス語使用などが糾弾され、「礼儀正しく、秩序を重んじ、良き趣味をもつ」市民生活が唱えられた。そこには理性的かつ道徳的生活＝欠けることのない幸福な生活を送ることにより世界は改良されるという信仰も指摘できよう。市民女性も「教養」をもつべきであるとされ、18世紀後半には女学校も創設されたが、教育内容は男性と違って、裁縫や唱歌、上級ドイツ語にフランス語といった具合であった。女性の教育には「知への権利」は認められたものの、男女の性役割の強調といった道徳的要請がなされた。¹²⁾

18世紀末になると神学者や大学教授や国家官吏が、ドイツの上層市民層にあたる教養市民層向けに、市民生活に関する啓蒙著を次々と世に出した。『テオフローン、未熟な若者へ、経験豊かな助言者』(1783年)、『続テオフローン、娘に寄せる父からの助言』(1789年)、『良き娘、良き妻、母、主婦になるためのテクニック』(1795年)、『エリーザ、女とはどうあるべきか』(1795年)、『ローベルト、男とはどうあるべきか』(1799年)など、自らも教養市民層に属する著者たちは、従来とは異なる「愛のある家庭」を説きながらも、その家庭は性別分業に基づくものであった。こうした時代状況のなかでは、ケーニヒスベルクの法律家テオドール・フォン・ヒッペルが1792年に『女性の市民的改善』を出版して、男女同権を訴えても、批判にさらされるか、無視されるばかりであった。その翌年フランスでは、「人権宣言」に反対して、経済・社会・政治面における男女平等を主張したオランプ・マリー・ド・グルージュは処刑されたほどである。¹³⁾

歴史学者田岡雲供は『近代女性史』で、市民層の描いた新しい結婚の理想は〈愛にもとづく結婚〉であるとし、18世紀中頃までの伝統的、物質的見地が優位をしめていた結婚では、感情は理性と尊敬のもとにおさまっていたが、18世紀後半からは愛の結婚が普及したとする。「この愛は18世紀の意味での愛である。すなわち啓蒙主義の影響を受けた理性的な愛であり、情熱に押し流される愛は、理性というフィルターを通してないという理由で否定された。こうした愛にもとづく結婚により、夫婦の精神的共同体が強調されたのは新しい事実である。結婚の基礎には互いの考慮と行為と配慮がおかれ、満足と幸福の源泉である居心地のよい家庭、つつましい家庭、精神的内面生活をいとなむ家庭という姿が出てくる。そのかぎり愛の結婚は、この女性にしてこの男性といった具合に、他とは取りかえられない欲求をもつ個人化に基礎づけられていた。」¹⁴⁾

18世紀の結婚は啓蒙主義や個人主義の色彩を帯びていたが、身分違いの結婚はしかし容易ではなかった。1794年に発効したプロイセンの一般ラント法は、啓蒙主義的な法律ではあったが、婚姻法に関しては、まだなお身分制の名残が色濃かった。結婚の意思表示は強制であってはならないと、個人の意志を重視しつつも、貴族や上層市民が同じ身分の者と結婚する場合は「右手婚姻」、彼らが下層市民と結婚する場合は「左手婚姻」と区別し、後者の場合直接的な君主の許可が必要とされた。また「右

手婚姻」の息子は、生みの父の了解なしには結婚できないという家父長的要件も存在した。夫と妻の相互の義務として、同居義務・婚姻義務（性交義務）・婚姻誠実義務が課されたが、夫が家長であり、共同事項の決定の権利は夫にあった。¹⁵⁾ こうして見ると「愛のある結婚」もかなりの制限付きであったことがわかる。

しかし一般的な傾向からすると、フランス革命の影響で、ドイツで婚姻法が、宗教的・中世的拘束から離れ、自然法的色彩が強まり、個人的な見解がより重要視されるようになってきたことも事実である。

そもそもドイツに近代的な意味での「家族」(Familie) という概念が導入されたのは、18世紀末のことであった。当時出版された市民啓蒙書である『経済百科全書』でその著者クリーニッツは、家族を、奉公人を除外した、夫婦と子供から成立する再生産の場と規定し、家庭での愛と計画性に満ちた母親の教育を重視した。職業領域と家庭領域の分離が、それまでの「家父」と「家母」の共同経営といったドイツ式家族経営を衰退させ、性別分業をもたらしたのであった。¹⁶⁾

近代家族の成立に伴い女性は家父長制という新たな抑圧をうけることになったが、地位向上といった現象もそこにはみられたのではないだろうか。ドイツの社会学者マリアンネ・ヴェーバーは、カルヴァン派の世俗内禁欲倫理が、18世紀後半家族法に影響を与え、家庭生活における女性の地位向上に貢献したとしている。「欲望生活の倫理的規律化を日常的な態度として要請するカルヴァン派は、合理的職業労働のみならず、実効的な一夫一婦制へ男性をも内面的に方向づける。この倫理的レベルでの性道德の平等化により、婚姻忠誠への請求権が妻にも約束される。男性の側での性的な自己規律化をもって初めて、妻以外の女性に対する夫の性的ファンタジーが断ち切られる。」¹⁷⁾

こうして婚姻は市民契約の一つとなり、自由契約に基づく愛と寛容の共同体となり、ドイツ「新市民」はまさしく時代の社会的・政治的・文化的変動に対応した「親密な、愛に基づく、内面的で、閉じた家庭」を作り上げたのだった。

フランスのアナール派の歴史学者フランドランの大著『性の歴史』によれば、フランスにおいても、18世紀に初めて、上層市民の間では恋愛なしの結婚を一種の略奪婚とみなすような風潮が出てきて、「恋愛結婚」が『フランス・アカデミー辞典』に初めて掲載されたのは革命暦6年(西暦1797年/1798年)のことである。農民においては、恋愛は上層階級よりずっと自由であったが、結婚にあたっては、現在よりずっと強い権威を持った親の承諾が必要で、またさまざまな経済的・社会的要請を配慮せずにいられない状況にあった。また恋愛は結婚までで、結婚後には妻は夫に従属しなければならなかった。¹⁸⁾

こうしてみると近代資本主義の発達、市民階級の台頭、近代家族の成立と同時にロマンチック・ラブ・イデオロギーが、18世紀には欧州全体に成立していったことがわかる。

2

ところで18世紀ドイツにおける恋愛結婚イデオロギーの成立を考える場合、当時の青年に圧倒的に支持され、今日でもなお「永遠の青春の書」とされるゲーテの『若きウェルテルの悩み』の分析を欠かすことはできないであろう。自分自身の道ならぬ恋の経験、知人より聞いた恋愛に破れた青年の自殺を題材としたこの恋愛小説は初版が1774年に、改訂版が1787年に出版されている。前述した道德週刊誌同様、18世紀には文学の世界でもシェイクスピアやリチャードソンやスターンなどのイギリス文学がドイツに取り入れられ、人気を博した。この『若きウェルテルの悩み』が若者の恋愛を描いた書簡体小説であるのも、『クラリッサ』や『パメラ』などの若者の恋愛を描く書簡体小説を書いたリチャードソンの影響が見て取れるだろう。

仏文学者山田登世子は小論『ロマンチックな文学とともにロマンチックな恋愛が誕生した』で、書簡体小説について次のように説明している。「書簡体というスタイルは、著者と読者のあいだにかつてなく親密な新しいコミュニケーションの回路をきりひらいた。読者は作中人物の心の動きを我がことのように感じて感情移入するようになったのである。書簡体というジャンルは、二つの魂が直接ふれあうかのようなイリュージョンをうみだし、ヴァーチャルなリアリティーを獲得した。(中略)近代の恋愛小説は、私的で孤独な心の内奥に生起する命がけのドラマとなり、二つの魂の冒険となった。」¹⁹⁾ 同じく独文学者池内紀も小論『恋愛病時代の書簡体小説』の中で、「書簡体は文学スタイルとして、知的で素人っぽく、ほのめかしたり、隠したり、意味ありげに打ち明けるのに適している。」²⁰⁾ とする。ところで仏文学者工藤庸子は今日的なメディアとしての手紙の機能が確定したのは18世紀のことであるとして、当時の手紙の模範文例集の流行が書簡体小説流行の基礎となったと説明する。「読み書きに習熟しようとする殊勝な男女は、他人様の恋文をむさぼり読むという新しい娯楽を発見してしまった。識字率の上昇、郵便制度の発達、そして人間のプライバシーというものへの切実な興味など、いくつもの理由がかさなって、手紙という表現形式が、大衆の圧倒的な支持を得ることとなった。」²¹⁾ こうして18世紀には書簡の形をとった恋愛小説が数々生まれた。山田はロマンチックな愛の誕生をこう解説している。「いわゆる情熱恋愛の感性とスタイルがここに花開く。近代の文学が〈ロマン主義文学〉と呼ばれるのは、この情熱恋愛に負うところが大きい。ロマンチックな文学とともに、ロマンチック・ラブが誕生した。」²²⁾

ルソーの『新エロイズ』と並ぶ代表的な書簡体小説であるゲーテの『若きウェルテルの悩み』は、主人公の性は異なるものの、リチャードソンの描く道德・家族小説同様、階級社会の名残を色濃く残した社会と揺れ動く若者の恋愛心理が細かく描かれていることが特徴といえよう。市民社会の成立とともに、家柄・血統の否定、業績を重視した個人主義重視の市民道德の成立が、恋愛においては貴族社会の情事的恋愛から市民社会の情熱的恋愛への移行を促したのであった。

『若きウェルテルの悩み』は、若くて感受性豊かな優しい娘ロッテと、ロッテの婚約者アルベルトと、婚約者がいると知らずに恋に落ちたウェルテルの三角関係を描いた小説である。小説全編にわたって、

リチャードソンらの小説に見られるような感傷主義的な特徴、つまり主観的な感情過多、内面的な動揺や情緒の観察、至福の落涙にいたるまでの自己陶醉といったシーンが見られる。そこでは一方ではロッテとアルベルトの姿に18世紀当時のドイツのブルジョア層に典型的な啓蒙主義的な、未来志向的で理性的な愛が示されるとすれば、他方ウェルテル像には、時代を先取りした、反啓蒙主義的で、「シュトルム・ウント・ドラング」的ともいえる刹那的で激情的な愛が描かれている。

ロッテがウェルテルを諭す場面では、彼女が敏感にウェルテルの激情的な性格と恋愛の底にある無意識を指摘して、二人の愛の形が異なることが明らかとなる。「ああウェルテル、なぜあなたは、ひとたび関心をもったことにあくまで情熱を抱きつづけるような性質に生まれついているのでしょうか。(中略) すこし自分を抑えるようになされば、あなたのような精神と知識と才能をもっている方は、どれほどいろいろな人生の楽しみを味わうことができるでしょう。どうか男らしく勇気をもって、わたしのよう、あなたを気の毒がることしかできない人間に未練をもつのをきっぱりとやめてください。』²³⁾ ウェルテルの激情的振る舞いは、ロッテやアルベルトによって代表される理性と感情の調和を図りながら、市民が自己決定をして、道徳的に振る舞うといった当時の市民道徳に反するものである。星野純子は『ゲーテ時代のジェンダーと文学』でウェルテルの激情についてこう述べている。「制御できると見なされた感情が、道徳的にも正しい感情として受け入れられ、このような感情をもつことは人間らしさの証とされるが、それに反してあからさまな官能性や凶暴な情熱は、正しくない、不健康な軽蔑すべきものとされたのである。』²⁴⁾

ロッテはウェルテルの恋愛感情における利己主義と破滅志向を見抜くが、細やかな感情を見せ、優しく諭す。「あなたは自分の身を滅ぼそうとしていらっしゃる。そう思いになりませんか。なぜわたしでなくてははいけませんの、ウェルテル、なぜとりわけわたしのよう他人の妻になった人間を追いかけるのです。わたしおもうのですけれど、わたしを手に入れるのが不可能なので、そのためあなたは自分の願望に熱意を感じていらっしゃるのではないのでしょうか。』²⁵⁾ ゲーテを敬愛するドイツの文豪トーマス・マンは米プリンストン大学での講義録『ゲーテのウェルテル論』で、この小説を恋愛小説よりウェルテルの破滅の物語と見て取って、次のような批評を展開している。「ウェルテルには、この世界において、生に対する苦悩と、自分の不完全さに対する悲しい慧眼と、彼の首を締めあげるハムレット的な認識の嫌悪のほかには、なんの使命もありません。それゆえに彼は滅びなければなりません。彼の〈物語〉は、他人のものである女に対する彼の望みのない、許されざる恋は、彼の死への憧れがよそおった仮装であり、多かれ少なかれ、彼の破滅の偶然的な形にすぎないのであります。』²⁶⁾

しかし人妻ロッテも社会秩序を守る枠内では思い切り激情にひたることもできた。18世紀半ば頃のドイツは啓蒙主義に対して、感受性が重んじられた「感傷主義」の時代でもあった。感傷主義の作品には歓喜の涙がつきものである。次は、雷雨に襲われたダンスパーティーの後、ロッテの魂がウェルテルの魂にもっとも近づいた場面の描写。感傷主義の特徴である卓抜な田園の自然描写でもこの作品の最も有名な場面である。「僕たちは窓辺に歩み寄った。遠くの方に雷鳴がまだ残っていた。心地よい雨が大地に降り注いでいた。さわやかな香りが、暖かな大気に溶け合って僕たちのところまで立ち上

てきた。ロッテは頬杖をして佇み、あたり一面を見やっていた。彼女は空を仰ぎ、それから僕を見た。眼にはいっぱい涙を溜めていた。彼女は手を僕の手のにせて言った。クローズアップ！この言葉によって彼女が僕に伝えようとしたあふれるばかりの感情に僕はひたりきった。僕はがまんできなくなって、彼女の手の上に身を屈めて、歓喜の涙にくれながら、キスをした。』²⁷⁾ この時代、感傷主義は女性に体现すると思われた時代であった。

ロッテの清純さと無垢を強調した初版と、ロッテのウェルテルへの恋心と抑制およびロッテのコケティッシュな仕草などを書き加えた改訂版で、ロッテ像は微妙な変化を見せているが、この一方的独白ともいえる書簡体小説で描かれるのは、ゲーテの理想ともいえる神聖な天使としての女性像であろう。ウェルテルの一目惚れはこう描かれている。「ロッテは僕にとって神聖な人だ。彼女の前に出ると欲望もすっかり沈黙してしまう。彼女のそばにいと、自分がどうなっているのか、さっぱりわからなくなる。気が動転してしまう。』²⁸⁾ ルソーの「新エロイズ」同様、ゲーテはこの小説で、肉欲を麻醉にかけ、神への献身を思わせる、宗教的ともいえる愛を描いた。上記二作品を代表とする「感傷小説」で、恋愛は疑似宗教ともなったといえる。

ともあれ、ゲーテの幻想でもあるロッテ像には、時代的な限界も見て取れる。ピアノやダンスといった女性的「教養」を身につけ、文学的教養もウェルテルと分かち合い、豊かな個性をもつとされる「新しい女性」ロッテにはしかし「官能性」が欠如し、自己決定の能力がない。星野純子は次のように分析している。「ロッテは最初に登場した時から半ば母親であり、アルベルトという婚約者もいるのに、エロスの雰囲気を感じさせない存在である。女性のエロスや女性の欲望は感傷主義では排除される。

(中略) 人間として自立した決断が要求される場所では、彼女は無力をさらけだし、毅然とした行動がとれない。』²⁹⁾ ロッテは当時の理想である可愛い、感受性豊かなしかし従順な妻のイメージからはずれてはいない。またウェルテルがロッテに高度な知性や教養を求めていることは、学問があり、聖書研究に首を突っ込む牧師の妻を描いた記述からでも明らかであろう。

18世紀の恋愛・結婚・生殖のロマンチック・ラブ・イデオロギーの成立は、アルベルトとロッテ夫妻の描写に見て取れよう。売春による性的満足・政略結婚・婚姻外恋愛といった以前の貴族的な結婚形態は問題となりえず、ロッテ夫妻の理想は「愛のある幸せな家庭」である。アルベルトは「良い暮らしのできる官職」につき、亡き母に代わり子供たちの世話をするロッテは「良妻賢母」の資格も十分である。

ロッテとアルベルトの愛について、実際のモデルに言及しながら、トーマス・マンも次のように述べている。ケストナーとはアルベルトのモデルとなった人物である。「この婚約者は、ハノーファー出のケストナーという公使館書記で、ごく普通の、しかし立派な人物である。彼は誠実にロッテを愛し、彼女も信頼をこめてその愛に答えている。注意しておかなければなりません、そこには情熱というものではなく、愛がないとはいえないまでも、あるのは、共同の未来、理性的な目標、家庭の建設に向けられた、静かな相互の好意であります。』³⁰⁾ こうした結婚こそ当時の上層市民の理想的な結婚であった。こうした「静かな相互の好意」対し、ゲーテは自らの経験をもとにウェルテルの激情を理想化し

て描いているが、トーマス・マンは当時のゲーテ＝ウェルテルを「詩人にして天才、誠実にして率直、しかしまた不実な、世間的に意味では信用のおけない感情のヴァガボン」³¹⁾と断じている。

トーマス・マンは、この作品のテーマを自殺願望＝生の嫌悪とし、ゲーテ＝ウェルテルの愛を、生の堅実さの欠けた、無目的のさまよえる感情、目的のない情熱と批判して、この作品を恋愛小説の傑作とはみなしていない。しかし18世紀の啓蒙主義に反発し、感受性を重んじ、感情の機微を描いた「感傷小説」の伝統につながる傑作であることは認めている。トーマス・マンはゲーテを「仮借ない内省、自己省察、自己分析の痛々しいまでの大家」と評価し、この小説をこう評価している。「この小さな小説は間然とするところのない傑作であります。魂の細目や、心理的な要因、特徴が、賢明に、繊細に、確かに。毛ほどの隙間もなくはめ込まれたモザイクです。」³²⁾ 歴史も小説も時代ごとに姿を変える。確かにこの「永遠の青春小説」は、現在から見ると女性像や情熱恋愛の描写に若干の古さを感じさせるものの、現在にもなお通じる初々しい、繊細極まる感受性で、「静かな愛」から「激しい恋」まで、愛の喜びから絶望まで愛の諸相を描ききった傑作と言えよう。

3

実際は日本で恋愛結婚が見合い結婚を上回るのは、1960年代の半ば頃からで、恋愛結婚はわれわれが考えるほど古くからの慣習ではないのである。現代ではしばしば、恋愛結婚イデオロギーの衰退がいわれるが、恋愛結婚が日本で支配的になってからまだ半世紀もたっていないのである。恋愛結婚イデオロギーは消滅したのか。冒頭にあげた恋愛結婚イデオロギーの衰退の諸原因の他、もともと恋愛という感じ方が、あまり根付いていなかったのではなかったとも考えられる。芸能や小説、結婚式はともかく、今日でも日常場面では、「恋愛」という言葉も、さらには「愛」という言葉もそれほど定着してないように思われる。

それどころか、「恋愛」ほど罵詈雑言を浴びせられた言葉も少ないのである。心中までして男女関係の機微に精通していたはずの太宰治はエッセイ『チャンス』で、「恋愛」や「愛する」という語に噛み付き、「愛する」という言葉に、キリスト教や西洋ヒューマニズムを嗅ぎ取り、愛がプラトニック・ラブなら、性と愛は結びつかないと強調する。太宰は、日本における過度に精神化された「恋愛」に欺瞞を感じていた。恋愛とは恥ずかしいものであるとして、彼自身の定義を次のように述べている。「恋愛。好色の念を文化的に新しく言いつくろいしもの。すなわち、性慾衝動に基づく男女間の激情。具体的には、一個また数個の異性と一体になろうとあがく特殊なる性的煩悶。色慾の Warming-up とでも称すべきか。」³³⁾ このエッセイが執筆された終戦後の昭和21年になっても、「愛」や「恋愛」という言葉に太宰は違和感を覚えていたのである。

我が国ではそもそも「恋愛」という語はいつからどのように使われるようになったのであろうか。もちろん我が国でも「恋」や「愛」は昔から文学の最重要テーマではあったが、「恋愛」という言葉はなかった。「恋愛」は「恋」や「愛」、また「色」や「情」と区別するために、19世紀に作られた翻訳語

である。

柳父章の『翻訳語成立事情』によれば、「恋愛」が日本語の辞書に初めて登場したのは、1887年刊の『仏和辞林』で、amourの訳に「愛」並んで「恋愛」という語が見えるとある。もっとも幕末から明治初期に使われたメドゥーストの『英華辞典』（1847-48年刊）にはloveの訳語として、「愛」「好」と並んで「愛惜」「恋愛」などがあったようである。柳父は明治時代の女性啓蒙雑誌『女学雑誌』1890年明治23年10月号における主宰者巖本善次による批評から、次のように「恋愛」の誕生を説明している。「ここでくラブ(恋愛)>ということばが登場しているのだが、筆者はこれをく恋>などのようなく不潔の連感に富める日本通俗の文字>とは違う、と考えている。Loveとく日本通俗>のく恋>とは違う。そこでそのloveに相当する新しいことばを造り出す必要があった。それがく恋愛>ということばだったわけである。」³⁴⁾

『女学雑誌』とは巖本善次を主筆として明治18年7月から明治37年22月まで発行された雑誌で、「女学」とは「婦女子に関する一科の学問」とある。現代のほぼ「女性学」にあたるであろう。野辺地清子は『女性解放の源流』で、巖本の考えた当時の「女学」の必要性を次のように解説している。「従来の男性社会—男性中心社会—においては、女性は抑圧された性であって、日常生活においては政治も教育も法律もそれら社会制度のすべてが男性中心で、女性の存在は全く無視され、忘れられ、棄てられ、発達すべき心身も発達せず、伸張すべき権利も伸張せず、さらにまたこれが原因となって、またいっそう忘れられ棄てられていく、という悪循環を繰り返している。」³⁵⁾ 島崎藤村の『桜の実の熟する時』には、『女学雑誌』や巖本の周りに集まる青年期日本の青年たち、未知で自由な世界に憧れる多感な青年たちの姿が生き生きと描かれている。女性解放の呼びかけは、封建制から近代への移行する時代の青年たちの心を捉え、『女学雑誌』の唱える神の前での平等、ピューリタンの恋愛、愛や自由が明治青年たちにとっては新鮮な響きをもっていたのであろう。この『女学雑誌』は単なる婦人誌にとどまらず、『国民之友』と並ぶ代明治期の代表的なオピニオンリーダー誌で、数々の逸材を世に送り出し、20年にわたって、日本の近代化のなかで輝かしい足跡を残してきた雑誌であったのである。

「恋愛」には「清く正しい」とか「深く魂より愛する」といったニュアンスがこめられたのであった。過去を否定して新しい道徳を唱える明治の教育家には心と体の分離を前提としない日本通俗の「恋」を、霊肉分離の西洋型「恋愛」と区別する必要があったのである。佐伯順子は『恋愛の起源』で、「色」に対する「恋」の特色を、一対一、肉体関係排除・精神関係賛美、結婚内、日常生活と整理している。³⁶⁾ 近代日本は新しい時代に対応するため「恋愛」を軸とした、一夫一婦制の恋愛結婚による「愛のある家庭」を必要としたのであった。

西洋における「恋愛小説」の流行が「恋愛」を流行させたように、「恋愛」ということばが、若い人々に「恋愛」を「男女交際」を「自由結婚」を流行させた。『小学館 日本国語大辞典第二版』によれば、「愛恋」「恋慕」といった語の代わりに「恋愛」という語が用いられるようになったのは明治22年頃からとある。明治20年代に「恋愛」は流行語となり、急速に広がり、明治30年代に恋愛・結婚・家庭という考え方が確立したと考えられる。

巖本善治は「恋愛」と並んで「家庭（ホーム）」の普及にも尽力した。巖本は明治18年の創刊の年の『女学雑誌』第5号で以前からある「家庭」ということばに欧米流の「ホーム」を重ね合わせて。「ハッピー、ホーム（幸なる家庭）」という語を用いた。加藤秀一は『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか』で、「新しい家庭」についてこう書いている。「形態からみれば、それは夫婦と子ども、および父兄の親族という血縁で結ばれた者に限られた空間であり、もはや前近代のように奉公人は含まれていなかった。同時に、そこでは規律にしばられた武家家族とは異なり、（中略） 家族成員の心的交流に高い価値が与えられた。」³⁷⁾ 明治女学校の校長にもなった巖本の女子教育は、神の前での平等を唱え、女性の隷従は否定しつつも、女性の特性を生かした性別分業論に基づく「良妻賢母」教育であった。ところで『近代ドイツの結婚と家族』で若尾佑司が分析しているように、キリスト教の結婚原則は、そもそも男女間の序列を認める家父長制と、一夫一婦制の非解消原則からなっているのである。³⁸⁾ 「幸いなる家庭」は女性の解放と、家父長制を温存したキリスト教結婚原則の混合物であった。

蓄妾制度を廃止し、一夫一婦制を成立させ、廃娼運動を推進することにより「新しい結婚制度」の誕生に力を貸したのも、巖本らのキリスト教改革運動であった。明治21年には東京婦人矯風会が当時の元老院に一夫一婦制の建白書を提出し、明治25年からは日本基督教婦人矯風会も運動を引き継いだ。「恋愛」と「一夫一婦制」が「新しい家庭」の基礎となったのである。

4

『女学雑誌』で主張された理論的・キリスト教的「恋愛」を實踐して、木下尚江や島崎藤村等の明治青年男女の希望の星となったのが「恋愛至上主義者」北村透谷である。漱石や鷗外さえ自らの恋を棄てて「強制結婚」をする時代にあつて、当時「自由恋愛」をして「自由結婚」をしたのが北村透谷であった。透谷の恋愛により近代日本の恋愛が確立されたとされる所以である。時は1888年(明治21年)、この年透谷は受洗し、同年結婚した。花嫁は既に婚約者もあつた三歳年上のキリスト者石坂美奈であつた。透谷北村門太郎の父快蔵が下級官吏であつたのに対し、美奈の父は自由民権の指導者であり、神奈川県県会議長や群馬県知事を歴任した石坂昌孝であつた。既に小学校より自由民権運動に参加していた透谷と美奈の弟公歴は自由民権運動過激派に参加する政治的同志であつた。

しかし次第に朝鮮革命を目指し、大阪事件を起こした自由民権運動過激派についていけなくなった透谷は深い挫折感を味わっていた。勝本清一郎の『北村透谷』にあるように、透谷はキリスト教と恋愛に救いを求めた。宗教的な響きのする「恋愛至上主義」は、透谷の深い挫折感と救済願望から作り上げられたのである。

透谷は1892年(明治25年)『粹を論じて〈伽羅枕〉に及ぶ』で自ら「恋愛」と「粹」の違いについて論じている。透谷は「恋愛」の特徴を「盲目性」と「相思相愛」としている。「盲目性」には激情型の透谷の性格も見て取れよう。「恋愛の性は元と白昼の如くなり得る者にあらず。(中略) 恋愛が盲目なればこそ痛苦もあり、悲哀もあるなれ、また非常の歓楽、希望、想像等もあるなれ。」³⁹⁾ と透谷は書い

ている。また「相思相愛」についてはこう書いている。「次に粹道と恋愛と相撞着するべき点は、粹の雙愛的ならざる事なり。抑も粹は迷はずして恋をする者なり、故に他を迷わすとも自らは迷はぬを法となすやに覚ゆ。」⁴⁰⁾ 透谷は、近代的な「恋愛」を確立して、恋愛を禁止した儒教道徳からの解放、同時に恋愛を「粹」の反対として軽んじてきた江戸伝統文化から解放を成し遂げたといえるだろう。

同年透谷は不気味な「恋愛至上主義」宣言ともいえる『厭世詩家と女性』書いた。「恋愛は人生の秘鍵なり、恋愛ありて後人世あり、恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ」と「恋愛」を神聖視しながら、厭世詩家の結婚生活は悲惨だと結論する。「彼等は人世を厭離するの思想こそあれ人世に羈束せられんことは思ひも寄らぬところなり。婚姻が彼等をして一層社界を嫌厭せしめ。一層義務に背かしめ。一層不満を多からしむ者是を以てなり。かかるが故に始に加重なる希望を以て入りたる婚姻は後に比較的の失望を招かしめ、惨として夫婦相対するが如き事起こるなり。」⁴¹⁾ 透谷の恋愛のすすめは実に恋愛結婚への警鐘ともなっている。こうした考え方は、現代の「恋愛賛成・結婚反対」のシングルライフ賛美者とつながるだろう。また透谷の恋愛観には、透谷の「恋愛原理」である情熱恋愛の「盲目性」が根底に、奈美と情熱的な恋愛、経済的に悲惨な実際の結婚生活、教え子との恋愛、精神的な病など透谷自身の切羽詰まった思いが反映されているといえよう。

フェミニズム研究者上野千鶴子は透谷の恋愛観、そして近代の恋愛観について嫌悪感を隠さず次のように批判している。「〈恋愛〉を非日常的な〈霊〉の世界へと聖域化してしまえば、現実的な〈結婚〉生活のなかでの〈幻滅〉は避けられない。そのことからわかることは、〈恋愛〉の精神的な特権化こそが、近代の宿痾だったのだということ、その観念をつくりだしたのは男であり、それに勝手に挫折したのも男である、という事実である。」⁴²⁾ しかし恋愛の「精神的な特権化」こそ、明治の「男女平等」を押し進めたことを考えれば、啓蒙主義的な「精神の特権化」と、厭世的な詩人の勝手な「精神的な特権化」は区別すべきであろう。

透谷の恋愛論のエッセンスは、ニコラス・ルーマンの『情熱としての愛』が分析しているように、愛とは盲目で、度を越すことがその本質であること、さらに度を越すことが愛の終わる理由であることといった情熱愛の提唱と分析にあるといえよう。⁴³⁾ 様々な障害を乗り越えて、新しい結婚＝恋愛結婚を自ら敢行した透谷が、愛しすぎることが、愛が終わる原因となることをまた身を以て示した。人一倍感受性の強い、激情型の透谷は、恋に生き、恋に死ぬ人生を自ら選んだと言えるだろう。

ちなみに透谷の使う「恋愛」という言葉の造語については、青木透が『北村透谷』で、造語「恋愛」の誕生の裏には、透谷が英語に堪能であったこと、英語の辞書には「愛恋」という単語が使われていたこと、透谷は漢字熟語を好んで倒置させたこと、さらに西歐的・キリスト教的なニュアンスをこめたかったことなどが挙げられるとしている。⁴⁴⁾ 「恋愛」は透谷から明治の青年へと広がって、一般的な観念となっていった。

キリスト教の教会は「恋愛空間」でもあった。『〈恋愛文化〉としてのキリスト教』で井上章一は、西洋でも古くから教会は恋愛の場であって、礼拝の後青年男女が声を掛け合う習慣があったという。さらに続けて「教会で男女が語らい合う習慣は、日本へもそのままもちこまれた。儒教道徳で交際を

禁じられた知識階層は、これにひきよせられていく。信仰にはふみこまない。しかし、異性と知り合うチャンスは多いに利用した⁴⁵⁾と書いている。明治期の島崎藤村から戦後しばらくまで、男女交際の場がきわめて限られていた青年男女にとって、確かに教会は「恋愛空間」でもあった。

恋愛空間をドイツとした恋愛小説が森鷗外の『舞姫』である。鷗外はドイツ留学から帰った後明治23年（1890年）にこの作品を発表した。ドイツ留学生とドイツ少女のしがらみのない自由な恋愛は当時の読者にはとても新鮮に映ったことだろう。日本の狭い男女交際の枠から離れた青年の男女交際は、日本の恋愛小説では画期的であった。

冒頭部のベルリン下町での豊太郎とエリスの出会いは、明治恋愛文学の白眉といえよう。「今この処を過ぎんとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声を呑みつつ泣くひとりの少女あるを見たり、年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪露は薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。わが足音に驚かされてかえりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問いたげに愁いを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に覆われたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深きわが心の奥まで徹したるか。⁴⁶⁾ 愛の妖精のような金髪碧眼の愁に満ちた若き娘の描写は実にエキゾチックな魅力に溢れている。

佐伯順子が『恋愛の起源』で指摘しているように、二人の「恋愛」は、プラトニックで学問的な師弟愛といった明治期恋愛小説の枠組みさえとっている。⁴⁷⁾ 豊太郎は職を解かれるまで清らかな愛を捧げるのみである。「余とエリスの交際は、この時まではよそ目に見るより清白なりき。（中略）余と相識るころより、余が借しつる書を読みならいて、ようやく趣味をも知り、言葉の訛をも正し、いくほどもなく余に寄するふみのも誤字少なくなりぬ。かかれば余ら二人の間にはまず師弟の交わりを生じたるなりき。」⁴⁸⁾ 現代にも通ずる甘い同棲生活の描写もまた魅力的である。「かれはいかに母を説き動かしけん、余は彼ら親子の家に寄寓することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの取入を合わせて、憂きがなかにも楽しき月日を送りぬ。朝の珈琲果つれば、かれは温習に往き、さらぬ日は家に留まりて、余はキョオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出てかれこれと材料を集む。」⁴⁹⁾ プラトニックラブ、「教養」的雰囲気といった明治恋愛小説の道具立てに加えて、若い二人の甘い同棲生活やエリスを通してみる金髪碧眼の異国情緒また女性の経済的自立といった新鮮な要素、なによりも恋愛の本質である存在を賭けた「恋愛」により、この『舞姫』は明治期最高の恋愛小説だともいえよう。

この小説は単なるモデル小説とみるべきではなく、鷗外は、明治20年代の新しい「恋愛」を求める青年男女にむけて、自分の体験を瑞々しい恋愛小説に昇華させたと考えられよう。日本文学研究者野口武彦はこの『舞姫』について、エリスは実際には平凡な踊り子であったとして、次のように述べている。「この作品を〈舞姫〉と名付けたこと自体が一つのフィクションで、現実には単なる「踊り手」にすぎなかったドイツ人女性との体験を〈舞姫〉というふうに変えて一幅の恋物語に仕立てたというところに、明治二十年当時の日本の、近代恋愛というものに対する渴望もふくめた形でのロマン化があるように見てよいのではないかと思います。」⁵⁰⁾

まとめ

最後に日欧比較文化の立場から「恋愛」について考えてみたい。ヨーロッパにおける近代的「恋愛」の起源は、18世紀後半『新エロイーズ』や『若きウェルテルの悩み』といった恋愛小説の書かれた時代に遡る。日本において「恋愛」は、北村透谷や『女学雑誌』の巖本善治が活躍した明治二十年代つまり19世紀後半、欧米に約一世紀遅れて成立した。欧米の恋愛が間接的には啓蒙主義、直接的にはリチャードソンなどの感傷主義の影響下にあったのに対し、日本の恋愛はアメリカからきた禁欲的なキリスト教の強い影響のなかで生まれた。恋愛におけるプラトニック・ラブや師弟愛的愛の強調は日本恋愛小説の特徴といえるだろう。欧州でも日本でも「恋愛」は「小説みたいな恋をしたい」青年男女によって競って読まれた「恋愛小説」によって広まった。

ところで市民道徳における「恋愛」は結婚や「愛ある家庭」と結びついていた。恋愛・結婚・生殖の強い結びつきを特徴とするロマンチック・ラブの誕生である。ロマンチック・ラブは近代産業の発展による、男は外の労働、女は家事労働といった性別分業体制にマッチした制度である。「恋愛」によって成立した核家族を中心とした家族が「近代家族」であるが、日本の近代家族である「イエ」は核家族プラス男系家族で遺産・家風の伝承を目的に構成されていた。こうした事情もあり、日本では明治以来見合い結婚が主流で、恋愛結婚が見合い結婚を上回ったのは核家族が急増した1960年代の半ばであった。

また「恋愛」の普及に関しては、巡回図書館、読書クラブなどの他、ドイツの「道徳週刊誌」や日本の「女学雑誌」「文学界」などの雑誌の活躍も見落とせない。新しい市民の生き方、新しい女性の生き方は雑誌とともに広まった。ヨーロッパにおける識字率の上昇や郵便制度の確立も、書簡を流通させ書簡体の恋愛小説を生み出した要因であった。ちなみに近年わが国では電子メールの普及により、情報社会の書簡体小説ともいえるべき、「リアル・ラブ・ストーリー」と賞するインターネット小説が登場したことは注目に値する。

ロマンチック・ラブ・イデオロギーに関していえば、日本の戦後はその広範な普及と衰退の時期にあたるといえるだろう。恋愛が自由化され、恋愛即結婚というイデオロギーが急激に浸透したのは日本では戦後のことである。山田昌弘の『結婚の社会学』によれば、戦後しばらくは結婚を前提としない恋愛は否定され、家庭や学校による恋愛管理が進んで、恋愛はかえって不自由になったとある。しかし女性の社会進出や、政治の季節の集結、恋愛空間の拡大、車社会の到来、情報機器の発達などで1970年代からは、恋愛の自由化が進んだ。活発な男女交際社会では、恋愛と結婚は分離し女性の高学歴化、社会進出で性別分業は揺らぎ、女性の「上昇婚」も望み薄になり、結婚難の時代が到来したのであった。恋愛の自由化は、経済的自立が早いアメリカでは早期結婚、同棲の伝統がある北欧では同棲の増加をもたらしたが、経済的・精神的自立が遅い日本では結婚難をもたらした。恋愛の自由化とロマンチック・ラブ・イデオロギーの衰退は日本では結婚難を引き起こしているように見える。⁵¹⁾

しかしこうした現象の背景には、一方では依然として強固なロマンチック・ラブ・イデオロギーの

存在が見て取れないだろうか。「恋愛」があるいは「激しい愛」が結婚と密接に結びつかなければならない現代では、「愛」がなくなれば何度でも離婚を繰り返さなければならない。離婚を繰り返すエネルギーがなければ一步引いて恋愛はするが、結婚しない非婚を選択するか、出産可能年齢の限界まで相手を選びぬく晩婚をとるかしなければならないからである。非婚・晩婚・離婚の増加原因には、女性の経済的自立傾向と同時に、個人主義や快樂主義と結びついた現代的「恋愛至上主義」=現代版ロマンチック・ラブ・イデオロギーの一層の深化も考えられる。

「恋愛」は仕事のできる男=強い男と家事・育児のできる女=優しい女を結びつけて、性別分業を強制し、女性の抑圧を内蔵した「近代家族」形成のための「神話」であった。「愛する人と結婚して一生を送ること」は近代人の「理想」となった。現代においては「夢」や「理想」を制限する条件がなくなり、「夢」や「理想」はかつての輝きをなくした。あたらしい理想の世界は「家族」形成=結婚のしがらみを離れた「自由」で「孤独」な世界であろうか。それとも恋愛の強制から逃れ、異性愛主義からも、性別分業からも自由な「友愛結婚」であろうか。あるいは現代版「恋愛至上主義」の勝利であろうか。

註

- 1) NHK 放送文化研究所 『現代日本人の意識構造』(第6版)、日本放送出版協会、2004年。
- 2) ウーテ・フレーフェルト 『ドイツ女性の社会史 200年の歩み』若尾佑司他訳、晃洋書房、1990年、287頁。
- 3) ローレンス・ストーン 『家族・性・結婚の社会史』北本正章訳、勁草書房、1991年、235頁。
- 4) 前掲書、同頁。
- 5) アンソニー・ギデンス 『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』、而立書房、1985年、64頁。
- 6) 前掲書、64—65頁。
- 7) 前掲書、65頁。
- 8) 前掲書、72頁。
- 9) テリー・イーグルトン 『クラリッサの陵辱』大橋洋一訳、岩波書店、1987年、24-25頁。
- 10) Shorter, Edward. "The Making of the Modern Family", Basic Books, 1975. p.17.
- 11) イーグルトン、前掲書、27頁。
- 12) ウルリヒ・イム・ホーフ 『啓蒙のヨーロッパ』成瀬治訳、平凡社1998年、292頁。
- 13) 木村靖二編 『ドイツの歴史』有斐閣、2000年、100-101頁。
- 14) 田岡雲供 『近代ドイツ女性史 市民社会・女性・ナショナリズム』、阿吽社、1998年、29頁。
- 15) 若尾佑司 『近代ドイツの結婚と家族』、名古屋大学出版会、1996年、29-35頁。
- 16) フレーフェルト、前掲書、12頁。
- 17) 若尾佑司 『ドイツ奉公人の社会史』、ミネルヴァ書房、1986年、256頁。
- 18) J・L・フランドラン 『性の歴史』宮原信訳、藤原書店、1992年、第1章参照。
- 19) 山田登世子 『ロマンチックな文学とともに、ロマンチックな恋愛が誕生した』(世界の文学30、朝日新聞社、2000年所収)、8-291頁。
- 20) 池内紀 『恋愛病時代の書簡体小説』(世界の文学30)、8-298頁。

- 21) 工藤庸子 『手紙というメディア』(世界の文学30)、8-299頁。
- 22) 山田登世子、前掲書、8-291頁。
- 23) Johann Wolfgang von Goethe. "Die Leiden des jungen Werther", Hamburger Ausgabe Bd. 6 hrg von Erich Trunz, S. 102. なお邦訳『若きヴェルターの悩み』神品芳夫訳(「ゲーテ全集第6巻」、潮出版社、1979年所収)を参照した。
- 24) 星野純子 『ゲーテ時代のジェンダーと文学』、鳥影社、2005年、37頁。
- 25) Goethe, Werther, S. 103f.
- 26) トーマス・マン 『ゲーテの〈ヴェルテル〉について』山崎章甫訳(講演集『ゲーテを語る』岩波書店、1993年所収)、230頁。
- 27) Goethe, Werther, S. 27.
- 28) Goethe, Werther, S. 39.
- 29) 星尾純子、前掲書、39-40頁。
- 30) トーマス・マン、前掲書、223頁。
- 31) トーマス・マン、前掲書、223頁。
- 32) トーマス・マン、前掲書、232頁。
- 33) 太宰治 『チャンス』、新潮社、1982年、215頁。
- 34) 柳父章 『翻訳語の成立事情』、岩波書店、1982年、90-91頁。
- 35) 野辺地清子 『女性解放の源流』、校倉書房、1984年、105頁。
- 36) 佐伯順子 『恋愛の起源』、日本経済新聞社、2000年、223-224頁。
- 37) 加藤秀一 『〈恋愛結婚〉は何をもたらしたか』、筑摩書房、2004年、49-50頁。
- 38) 若尾佑司 『近代ドイツの結婚と家族』、名古屋大学出版会、1996年参照。
- 39) 北村透谷 『粹を論じて〈伽羅枕〉に及ぶ』(勝本清一郎皇帝「北村透谷選集」、岩波書店、1970年所収) 93頁。
- 40) 北村透谷、前掲書、94頁。
- 41) 北村透谷 『厭世詩家と女性』(「北村透谷選集」所収)、88頁。
- 42) 上野千鶴子 『〈恋愛〉の誕生と挫折』(「発情装置」、筑摩書房、1998年所収) 110頁。
- 43) ニコラス・ルーマン 『情熱としての恋愛』、木鐸社、2005年参照。
- 44) 青木透 『北村透谷』、丸善、1994年、124頁。
- 45) 井上章一 『〈恋愛文化〉としてのキリスト教』(「キリスト教がわかる」朝日新聞社、2002年所収) 139-140頁。
- 46) 森鷗外 『舞姫』(日本文学体系11、筑摩書房、1974年所収)、45頁。
- 47) 佐伯順子、前掲書。「〈舞姫〉 異国で花開く恋愛」の章参照。
- 48) 森鷗外、前掲書、48-49頁。
- 49) 森鷗外、前掲書、50頁。
- 50) 野口武彦 『近代日本の恋愛小説』、大阪書籍、1987年、42-43頁。
- 51) 山田昌弘 『結婚の社会学』、丸善、1996年参照。